

第5章 街に出て

《信号無視》

訓練の合間の休日には、渋谷や原宿に行っていた。ショッピングをしたり、ブラブラしたりするには楽しい街らしく、よく繰り出していた。品川からは銀座の方が近いのだが、銀座にはあまり行くことがないと言う。理由を聞くと、銀座は若い彼女たちにとってあまり楽しくないらしい。

イギリスでは、信号は車のために設置されているようなところがあり、信号無視して道路を横断している歩行者をよく見かける。それを見ても、警官は何も咎めない。自分の責任で道路を横断する。車に轢かれないように自分で注意する。自分の身は自分で守るというのが、イギリス人の考え方になっている。日本人は信号にしたがって道路を渡るが、イギリス人は車が来なければ横断してしまう。

ある朝、朝礼のとき、ランチエスカが警察官に注意された話しになった。何人かで連れ立って、土曜日に渋谷へ出たらしい。信号が、「赤」だったけど車も来ないので横断し始めた。ちょうど道路の真ん中に差しかけたところ、おまわりさんにピピッと笛を吹かれたそうだ。よくわからないが自分たちが注意されているようすなので、とにかく元の歩道に戻った。

「日本では勝手に横断してはダメなのですか」

「歩行者(Pedestrian)も車のドライバーも“信号に従う”というのが、日本社会でのコンセンサスになっているのだ」

馬車から車社会に移行したヨーロッパと、駕籠から車社会に移行した日本では、交通安全に対するとらえ方も違う。馬はいつ暴走するか分からない。ヨーロッパ人は、馬がいつ自分の方に暴走してきてもいいように、心構えをしておかなければならなかった。車も、馬と同じく暴走することがある。暴走することがなかった駕籠文化の日本では、交通事故に遭うこともなく、自分で自分の身を守る習慣ができていない。

日本では、信号にしたがって横断していて事故に遭う人が決して少なくない。小学校の交通教室でも、道路の横断は、「青は渡れ」「赤は止まれ」と教えている。もう一歩踏み込んで、横断するときは車が止まるのを確認するところまで教えるとよい。

イギリスで信号待ちをしている時、車道に目をやると、

「Look Left」(左側を見よ)とか「Look Right」(右側を見よ)と書いてある。信号を見るより、まずは手前側の車線を走る車が来る方向を見ることが大切なのだと教えている。そして、信号が青になればすぐに横断しはじめる日本人と違って、信号に従っている時でも、イギリス人は、「赤」で車が止まるのを見届けてから横断しはじめる。

《日本人の肌》

誰でもそうだが、自分にないものがあると、人はそれにあこがれる。当時、日本の若者たちの間では、髪を茶や金色に染めるのが流行っていた。欧米人の金髪や栗毛色の髪、そしてブルーやグリーンのは、憧れの的だったのかもしれない。また、まわりの人とちょっと違う印象を与えることで、目立とうとしていたのかもしれない。一方、ロンドン基地 CA たちは、

「日本人の肌って、とてもきれいなのでうらやましいわ」

この「きれい」を、彼女たちは Gorgeous(ゴージャス)という言葉で表現していたのを思い出す。日本人は、黄色人種と言われているが、彼女たちの目には、日本人の肌はきめが細かく、ゴージャスに映るらしい。欧米人は、日本人に比べ、女性はうぶ毛が多いし、男性は毛深い人が多い。肌もあまりきめ細かくない。彼女たちもそれを知っている。

「日本人は、私たちみたいな髪の色に染めて楽しんでいて羨ましいわ。だって私たちは、日本人のような肌になりにくても、できないんですもの」。

《こどもが大好き》

本社見学や都内見学などで、ロンドン基地 CA を連れて東京の町に出ることが何度かあった。彼女たちは、街で赤ちゃんを見つけると、かならず近寄っていく。そして“So cute!”とか“Lovely!”を連発する。他人の赤ちゃんなのに写真を撮る娘もいる。クラスの誰もが、赤ちゃんや小さい子が好きだという。日本の赤ちゃんや小さな子は、彼女たちに言わせると、ポチャポチャしていて何とも言えなくかわいそうさ。ヨーロッパの若い娘たちは、小さな子に関心などないと思っていただけに、意外なことだった。

イギリス人は、元来、動物やこどもが大好きな国民だそうである。こどもを大切にしている。産業革命で国が豊かになる前は、こども達は重労働に駆り出され、十分な食べ物も

与えられず、何時間も働かされた時代が長く続いた。貧困のみならず、衛生状態もよくなく、何度かコレラやペストなどの伝染病にも見舞われた。1800年代前半には、1才から4才までの乳児の死亡率は、特に工業地帯では、50%近くになったという統計もある。小さな子の半分を失った過去の経験が、イギリス人をこども好きの国民にしたのかもしれない。

親が、7才以下のこどもだけを残して留守にすることを禁止しているし、こどもを道路で遊ばせてはいけないことになっている。こどもの命を社会全体で守っている。

大事にするが故に、こどもへのしつけもきびしい。他人に迷惑をかけたり、公共の物を大切にできなかったりした時は、親のみならず社会全体でこどもに注意をする。話題がしつけの話になったとき、カレン・M が次の英語表現を教えてくれた。子供たちが友達の家で食事に招待され、家を出るとき、母親は子供に向かって、

「Mind your P's and Q's !」

とかならず言うそう。直訳すると「人さまのところに行って P と Q を忘れないこと」であるが、意味は「マナーに気をつけなさい」ということなのだ。「P」は Please、「Q」は Thank you のキューを意味している。Please と Thank you を必ず言いなさいとしつけている。

《まわりへの配慮》

イギリス人の、まわりの人たちへの心配りには見習うべきものがある。他人がいるようなレストランや公共の場所などでは、決して大きな音を出さない。大きな笑い声も上げない。いつも静かにしているかという、やはり若い人たちである。騒ぐのは大好きだ。どのような時に騒ぐかと言えば、たとえば一部屋を借り切ったパーティーのように、他人の迷惑にならないときは思いっきり騒ぐ。

邦人 CA たちと、ときどき食事会や飲み会をすることがあった。そして、たいていは、場の雰囲気盛り上げる娘がひとりやふたりはいる。まわりの人たちも、つつられて、いつの間にか盛り上がり、他のお客のことは目に入らなくなる。話し声も一オクターブ上がっていく。日本の町ではよく見かけるが、外国ではほとんど経験しない光景だ。部下たちが楽しんでいるので、まわりの人たちに迷惑にならない限り、ワイワイさせておくのだが、ときどき「もう少し静かに!」と

注意することがある。

文化比較研究によると、一般的に、日本人の方が英語国民より声が高く、音量も大きいようだ。加えて、日本の若い女性は、わざと、「少女」のような声を出すことが多い。日本の男性がそれを好むことが背景にあるようだ。また、腹式呼吸の英語国民と違い、日本人が胸式呼吸で発声するから、どうしてもトーンが高くなる。ロンドン基地 CA と邦人 CA を見ていると、もの静かな話し方をするイギリス人は大人の女性に見える。日本の若い女性たちが子供っぽく見えるのも、話し方や話しているときのしぐさに起因しているようだ。

《騒音について》

音に対する比較研究もされているが、日本人が心地よいと思う周囲の音は、欧米の人たちには相当うるさく感じる。家でテレビをみている時の音量もけっこう大きい。駅や列車のアナウンスもしつこく感じる時がある。レストランやバーでかかっている BGM の音量もガンガンしている。BGM は Back Ground Music であるのに、Back ではなく、Music が前面に出てしまっている。ましてやパチンコ屋に入れば、耳をつんざくような音が 1 日中聞こえてくる。筆者も、パチンコ屋が嫌いではないのでよく行くが、夢中になると気にならない。それよりあのうるささがないと今ひとつ気が乗らない。

騒音に対しては、中国人も似たようなところがある。香港などの中華料理レストランで食事をする分分かるが、どのテーブルでもワイワイ言いながら食事をしている。まわりがうるさく話しが聞こえないので、ついこちらのテーブルでも大きな声で喋ることになる。これが中国式食事法なのだ。これに慣れると、あまり静かすぎると中国料理を食べた気がしなくなる。

ヨーロッパ社会では、騒音に関してはかなりナーバス(神経質)なところがある。例えば、夜に洗濯機や掃除機を使っていると、隣人から苦情がきたりする。緊急の場合を除き、他人の家へ、夜に電話をかけることも非常識とされている。国によっては、夜半に、車のクラクションを鳴らしてはいけないことになっている。ましてやアパートなどでは、子供が飛んだり跳ねたりしていると、昼間といえども階下の住人がすっ飛んでくる。このように、欧米社会では静寂さを大切に、お互いに騒音で迷惑をかけないようにしている。

《歩き方と足音》

街中や電車の中で気になるのだが、日本の高校生や若い人は、かかとを引きずった歩き方をする。そのような歩き方をすると、足音がだらしなく聞こえる。大人でも引きずって歩いている人を見かけることがある。

「日本人の歩き方って、なんだか幽霊が歩いているみたい」

欧米に行くチャンスがあったら、旅行の先々で、人間ウォッチングをしてみしてほしい。できれば日本人観光客とその国の人の歩き方を見比べてみるとよい。日本人はひざをよく上げないで歩いている。一方、欧米人はひざをしっかりと上げて歩く。欧米人から見ると、日本人の歩き方は、欧米の幽霊を連想させるようだ。日本の幽霊は足がないが、欧米の幽霊には足がある。そして、幽霊は、かかとを引きずったように歩く。

これは多文化とイス文化の違いからきている。多文化社会で育った日本人は、多文化を歩くときには「すり足」という歩き方をしてきた。着物を着ているため、ひざを上げることは作法に反していた。そして、ゾウリ・ゲタ文化である。ゲタでの歩き方は、カラコロンと音を立てるのがゲタらしい。ゾウリはかかとをすりながら歩く。ケツ文化の国々では違う考え方をしてきた。加えて、音に対する感覚の違いがあり、欧米では、かかとを引きずっているような音を出さないようにしている。

《走る》

日本人はよく走る民族のようだ。日本の中にいると、あまり気にならないが、欧米社会に行くと分かる。ホテルのロビーで、部屋に忘れ物をしてきたと言っては、エレベーターに向かって走っていく日本人旅行者をよく見かける。日本人が走るのを見て、欧米人は何か大変なことが起きたのではないかと心配する。欧米人は火事でも起きないかぎり走らない。

邦人 CA のたまごたちも、廊下を走っているのを見かける。その都度、「走るな!」と注意する。会社の中で走るのは、仕事の準備や手順が十分でないからだ、と教えている。忘れ物をするのも同じだ。

イギリスや他のヨーロッパでは、紳士や淑女たる者は走ってはいけぬ、と教育されている。紳士たる者は、どんなことが起きてもあわてずに、冷静な判断とともに、落ちついて

行動することが要求されている。女性が走るのも、大人として、はしたない行為と見なされる。ロンドン基地 CA たちも、廊下を走ることはしなかった。

《日本人は白い車が好き》

日本人は、一般的に清潔好きな国民と言われている。そして、「好きな色は?」と聞かれて、「白」と答える日本人が多いことも統計に出ている。カレンが風邪で授業を欠席した。そのため、放課後 1 人残させて補講することになった。補講が終わる時間帯には、当時の訓練所から京浜急行の旧羽田駅まで行くバスは終わってしまっている。筆者は通勤に車を使っていたので、途中、寮でカレンを降ろしてから帰宅することにした。

教官の車に乗っているからか、男性の車に乗っているからか、やや緊張気味だったカレンが独り言のように

「日本って白い車が多いのね」

とホツリと言った。当時、筆者の車も白色だった。確かに自家用車は白が多かった。経済誌で、車の色について興味ある記事を読んだばかりだった。その記事では、日本では景気のよい時は、白色の車がよく売れると書いてあった。その記事のお陰で、日本人は白を好むことや、景気がよい時は白色の車が売れることを、カレンに解説できた。その後、街中を走る白色の車がどのくらいの割合なのか調べてみたが、自家用車の 10 台中 5 台前後(当時)が白色をしていたのを思い出す。最近では、当時に比べると白い車はめっきり減ってしまった。景気が悪くなると、同じ車の所有期間も長くなるので、白系よりダーク系の車が売れるようだ。それでも、ヨーロッパの国で走っている白色の車の数に比べると、ケタはずれに多い。

《ヨーロッパの自動車》

ヨーロッパといっても暖かい国もあれば、平均気温が低い国もあるので、一概には言えないが、ヨーロッパの町では白色の車が似合わない。特に、空がどんよりした冬場には、白色は雲の色と同系色になるので映えないし、くすんで見えてしまう。白は青空に合う色である。イギリスやフランスで見るのは、濃い色の車が圧倒的に多い。

《日本のデパート》

訓練合間の休日には、日本のデパートにも行った。日本のデパートも、ロンドン基地 CA にとって、何か異文化を感じる場所らしい。

「日本のデパートでは、中に入ると、案内係の人がお辞儀をして挨拶をしてくれます」

「エレベーターの中にも案内の女性がいて、いろいろ説明しています」

ロンドンにも、Harrods、Liberty's、Mark & Spencer、Selfridges など、高級品を扱うデパートから大衆的なデパートまである。しかし、現在ロンドンのデパートでは、入口に入っても誰も挨拶をしてくれないし、エレベーターガールもいない。

イギリス人作家のジェフリー・アーチャーが、「フェルシー・テラスへの道」(As the crow flies) という本を書いている。1900 年代初頭に、ロンドンの下町から身を起しデパート王になった主人公を描いた物語だ。この本を読むと、イギリスのデパートも、当時は高級感を売りにしており、中産階級以上の顧客を相手にしていた様子がうかがえる。昔は、ロンドンのデパートにも「アーマン」や案内係もいたようだ。それが時代とともに大衆的になり、経営の効率化が求められ、余分な人員の配置はしないようになってしまったらしい。その点、日本でもデパートは大衆化した。同じ大衆といっても、日本人は中産階級意識がつよい。それらの顧客を相手にしている日本のデパートは、信用と格式を重んじていないと、消費者にソッポを向かれてしまうので、適度に高級感を維持している。案内係もエレベーター係もそれらの役割を担っている。

因みに、フェルシー街というのはロンドンの中でも高級住宅地として有名な場所である。

《いらっしやいませ》

授業の合間に、日本の印象について意見を述べさせた。人々がぶつかってくることや、電車に乗るときに押されて戸惑ったりもしていたが、感心することもけっこうあったようだ。その一つに、「日本では、店員がニコニコしてうれしそうに働いている」というのがあった。

「日本では、どの店でも店員がスマイルするし、客に "いらっしやいませ" と挨拶しています。みんなハッピーそうに働いているのでうらやましいです」

「日本の店員は元気です!」

確かに、デパートをはじめ、一般の商店でも、店員は愛想がよいし、客が店に入ってくると、「いらっしやいませ」と言う。銀行でさえも、「いらっしやいませ」と言っている。そしてニコシながら対応している。

ロンドンでデパートに入っても、誰も「いらっしやいませ」とは言わない。レストランでは、「Good afternoon !」や「Good evening !」とか「How are you, today ? sir.」とは言いが、「いらっしやいませ」に相当する表現を使うことはない。ましてや、両替するために銀行に入っても、「Hello!」の一言もなく、事務的な言葉だけで終わってしまう。日本人旅行者が、ヨーロッパの町々で買い物をして感じるの、店員の愛想のなさである。特に、有名ブランドを扱っている店の店員は、「簡単に笑顔は見せないわよ」といわんばかりだ。日本人から見ると、日本人が相手だから愛想がないのかしらと思ってしまう。欧米では、知らない相手にやたらとニコシないことは前にも書いた。お客になる人なのか、ただのひやかしなのか分からないうちは、店員にとって利害関係のない相手なので、やたらとニコシない。店員の愛想のなさは、イギリスだけでなくヨーロッパではどの国でも同じような傾向にある。

《ガイジンとガイジン》

みなさんが「ガイジン」というとき、どの国の人をさしますか。アジアの国の人達を呼ぶとき、私たち日本人は、「ガイジン」という言葉を使っているだろうか。私たちが「外人」という漢字をみたり、「ガイジン」と呼んだりするとき、そのイメージは、欧米人が対象になっていることが多い。

これは、歴史と関係がある。特に、大日本帝国時代に関係があるようだ。昔の日本にとっては、東南アジアのほとんどの国は、大東亜共栄圏の一員であり、身内と考えていた。

一方、日本にとって欧米諸国は、身内ではなく、外の人であり、日本人と考えを異にするコントロールできない人たちだと考えていた。「外人」ということばには、そのような響きが含まれている。「ガイジン」という言い方は、ロンドン基地 CA が、一番嫌いな日本語だった。そして、誰も教えていないのに、覚えた言葉なのだ。

「どうして日本人は私たちのことを“ガイジン”と呼ぶのですか」

「…」

「私たちの国では、“ガイジン”という言い方をしません。あえて他国の人を指す時には、どこどこの国の人と呼びます」

と、よく言われた。確かに、外国を旅行していると、旅で一緒になった人や、おみやげ屋の人に、「あなたは日本人か」とよく聞かれる。

そして、日本人は、「ガイジン」と呼ぶだけではなく、宇宙人がきたというような目で必ずジロジロと見る(Stare at)らしい。街の中でも、会社の中でも、同じ経験を味わっていた。濁音が入ったこの言葉の響きも、聞いている彼女たちにとっては、あまり気持ちのよいものではなかった。

私たちは、「ガイジン」という言葉を、何気なく使っている。意図がないのであれば、「外国からきた人」という意味で「ガイコクジン」の方を使ったほうがよい。テレビを見ていると、一部のタレントは平気で使っているが、放送コードでは、「ガイジン」は差別用語なので使わないようにしている、と聞いている。

《ジロジロ見る》

無意識のうちに、内と外を区別してしまうのは、日本人の昔からの癖になっている。昔の日本では、村人はお互い共同運命体として助け合いながら生きてきた。村の掟がつけられ、それを破る者は村八分にされた。よそ者が入っていくのは難しく、村人たちはよそ者に対して一種の警戒感を抱いていた。よそ者が来ると、村人たちは、そのよそ者を村に迎え入れてもよい人物かどうか品定めをする。

時代が変わっても、日本人の意識の中には、身内意識は強く残っている。国際化が進んだ現代でも、日本人は、同胞を信用するが、価値観の違う外国人に対しては色メガネをかけて見てしまう。悪い言い方をすれば、外国人は信用できない、と思っているフシがある。そこで、外国人を見ると、つい品定めのためにジロジロ見てしまう。

訓練の休みを利用して、クラスの何人かが箱根へ日帰り旅行に行ってきた。その次の月曜日の授業の合間に、隣のクラスのアルソンが、

「箱根旅行の途中、電車の中でも、旅先でも、日本人にジロジロ(They stared at us)見られるし、子供たちは私たちを指さしました。とても不愉快な思いをしました。日本では

他人をジロジロ見るのは失礼なことではないのですかと強い口調で言ってきた。

「まだ日本では、欧米の若い女性を見ることはあまりないのだ。それに皆が魅力的なので、ついジロジロ見てしまったんだと思うよ。マスコミの取材があったように、君たちは、日本ではまだまだ、めずらしい存在なんだ」

外国人があまりいないパキスタンのような国では、街を歩いていると、日本人がめずらしいのか、ジロジロ見られることがあった。しかし、ヨーロッパやアメリカでは、そのような経験はない。へたすると、ロンドンやニューヨークの街で、イギリス人やアメリカ人に道を聞かれる。

ロンドン基地 CA たちが入社してまもない頃、社内の人達でさえ、訓練を受けている彼女たちを見学にきた。「彼女たちがイギリス人なんだ！」と話しているのをよく耳にした。現場の邦人 CA たちも、最初のうちはロンドン基地 CA と同乗するとき、仲間というよりは、宇宙人も見るような目で見ていた。しかし今では、彼女たちを好奇の目で見る者はだれもいない。だれも見向きもしない。これと同じように、日本も、訪日外国人が年間 1900 万人(2015 年現在)を越える時代になり、外国人をジロジロ見る人は少なくなってきている。

《ぶつかっても謝らない》

「街を歩いていると日本人がぶつかってくる」というのも、彼女たちにとってあまり愉快なことではなかったらしい。

日本人はとにかくよくぶつかってくるらしい。欧米人は、前方に人がいると、ぶつからないようにと、方向を変える動作が、日本人に比べ早いそうだ。日本人はぎりぎりまで他人との接触を回避しない。寸前で避けようとするが、結局ぶつかってしまうらしい。

日本人は、狭い国土に住んでいるせいか、毎日満員電車に乗っているせいか、他人と接触することをあまり気にかけていないところがある。ぶつかっても、コワイお兄さん達以外は、文句も言わない。ぶつかられて手に持っていたものを落とされても、しょうがないという顔をして拾っている。

他人にぶつかって一言も謝らないのは、彼女たちの社会では考えられない。他人にぶつからないようにするのは、欧米では大切なマナーになっている。ましてや、ぶつかってしまったら、"Excuse me."とか"Pardon me."といって謝る

のが、当然のこととなっている。ぶつからないようにすべきであるのに、それができなかったのだから謝る。欧米の街を歩いていると、ちょっとでも身体に触れられることがあると"Excuse me."と謝られる。ぶつかった方もぶつかられた方も、お互い謝っている姿をみる。

《他人に触れるのはタブー》

当時の京浜急行は、今と違い、品川方面から羽田空港行きの直行電車はなかった。訓練中のロンドン基地 CA たちは、蒲田駅で空港線に乗換えて羽田まで通っていた。北品川駅から蒲田駅までは、下りなので混雑はさほどでもない。ところが、蒲田・羽田間の空港線は、車両の数も少なく、空港関係者の通勤でとても混んでいた。

大半の教官は、授業の準備があるため早めに出社する。ところが、一番年上のアレックスや CA 経験があるルイスや元 OL のフィオナが、教官たちより早く出社している。あるとき聞いてみた。

「どうして、早くきているのかね」

よく聞いてくれましたとばかりにアレックスが、

「通勤電車(Commuter train)が混むので、早い時間の Train に乗っています。乗車するとき、日本の通勤者(Commuter)は、私たちを押します(触ります)。我慢できません!」

《ソレハ侮辱デス》

訓練中に、「他人に触れる」問題でトラブルが起きた。授業は、他の教官にお願いすることもある。そこである教官の行動が、授業を一時ストップさせてしまったのだ。食事サービスの実技訓練の時、CA 役をしていたジャネットのサービスが、何かもたついていた。くだんの教官はイライラして、私が見本を見せるから後ろに下がっていなさいと言って、ジャネットの袖をつかんで後ろに下がらせた。邦人 CA であれば、自分ができなかったのだからしょうがないか、少し気恥ずかしいな、と思いつつも後ろに立って教官の手本を見ている。

ジャネットはまったく違った反応を示した。教官が袖を引っ張り、侮辱したということになってしまった。本人は、侮辱されたと思い、その場で泣き出してしまった。くだんの教官もビックリしてしまい、どう取りなしてよいのか困っている。

筆者は、たまたま授業がなかったもので、自分のクラスの人

たちが、しっかりとサービス実技を身につけているか様子を見ていた。授業が中断してしまったので、ジャネットをモックアップから連れだし、別の場所に移動し、落ちつくのを待って話を聞いた。彼女がいうには、自分はいろいろ考え工夫しながらサービスを行っていた。それなのに、皆の前で袖を引っ張られ、侮辱され、人格を無視された、というものだった。

くだんの教官が、袖を引っ張ることなく、「自分が手本を見せるから、見ているように」と説明していれば、このようなことは起きなかった。他人に触れることが、侮辱にまで発展することがある、というよい見本となった。

電車のなかで他人に触れられることも、袖を引っ張られることも、欧米人にとっては我慢のならないことなのだ。そこで、社内の掲示板に次のような案内が出た。

—ロンドン基地乗務員からのお願い—
私たちの社会では、他人に触れることは、とても失礼な行為となっています。私たちロンドン基地 Crew も、他人から触れられることに慣れていません。どうかお願いします。仕事中に私たちに触らないようにしてください。

日本では、「ねえー、ねえー、ちょっと聞いてよ。

彼ったらさあ・・・」と言っては、友達の肩をポンと叩いたりする。機内でも、「ジュリアン、ちょっと、これやってくれる」と言いながら、ロンドン基地 CA たちの背中をポンとやる。邦人 CA たちは、この行為に親しみを込めているのだが、相手はドキッとしている。

欧米では、相手の身体に触れるだけでなく、相手の持ち物や衣服に触れることもマナー違反となる。日本人は、「あなたのバッグ、すてきね」と言いながら、相手のバッグを勝手に触ることがある。くれぐれも注意を…。

《Good は普通》

訓練生がうまくできなかった時、教官としてどのような態度をとればよいか、いろいろ調べた。訓練生たちが、うまくできた時のほめ方も、知っておく必要がある。日本の感覚では、訓練生がうまくできても、「悪くなかったよ」「まあまあ

だったよ」程度の言い方で終わることが多い。そして、訓練生の方も、それを肯定的評価としてとらえる。小学校の生徒が相手ならいざしらず、社会人である CA のたまご達に対して、面と向かって、「よくできました」とはあまり言わない。教官の方も、訓練生だからこの程度だろうくらいに思っている。

「悪くなかったよ」を英語に訳すと "Not bad" となる。"Not bad" は、ヨーロッパ人の感覚では「良い」という評価にはならない。これを聞いて、ちょっとしよげている。

「まあまあできたな」と思って "Good" とすることもあった。ところが、彼女たちの感覚では、"Good" は「普通」評価に近い程度なのだ。本当によくできたと思ったときは、"Good" に "Very" を加えて、"Very Good" もしくは "Excellent" と言わなくてはならない。"Good" を使って、「よかったよ」と伝え、
「どうすれば "よくできた" と言ってくれるのですか」という質問が飛んでくる。欧米社会での評価は、Poor-Fair-Good-Very Good-Excellent の順になっている。"Good" は 5 段階評価法では普通評価となるのだ。

《人間(いんかん)距離》

欧米人と接するとき、「欧米人は、日本人より安全空間が広い」ことを知っていたほうがよい。

人間は、他人があまり近づくと落ちつかなくなる。公園のベンチで、1人で座しているところに、すぐ横に他人が座ったら、誰でも、その人との間に距離をおこうとする。

よく見ていると、イギリス人は、握手が終わると、一歩引いて立ち、相手と話しをしている。日本人は握手をした後、そのままの位置に立っている。イギリス人と日本人が握手をすると、イギリス人は、日本人が近づいたままなので落ちつかなくなる。

欧米人にとって、腕を伸ばしてぐるりと回した範囲が、自分たちにとっての最低限の安全空間と考えている。そのため、その安全空間の中に、他人が入ってくると落ちつかなくなる。できればもう少し離れてくれればとよいのに、と思っている。もちろん、これは他人同士の話しであって、恋人同士や家族の場合は、この空間距離はせまくなる。

欧米では、恋人同士や家族同士で抱き合っている姿をみ

る。欧米人は、無記名の他人との距離はある程度保っていたいと考えている。一方で、身内同士の距離は近く、接触度も多い。日本人は、他人との距離はあまり気にならないが、身内との距離も欧米人に比べ広く保つ。接触度も少ない。

欧米人は、電車の中でも、エレベーターの中でも、混んでいてもできるだけ他人に触れないように努力する。電車の中で、座っている乗客の両足の間に、立っている人の足が入り込むなどということは考えられないことなのだ。

《丈とフィート》

ドイツ哲学者の大橋良介氏によると、たたみ一畳は、ひとりの人間が寝起きするのに必要な最低限の広さだそうだ(『日本的なもの ヨーロッパ的なもの』大橋良介著 新潮選書)。「イジョウ」の「ジョウ」を表す漢字は「丈」であり、昔の日本男子の身長を意味していた。日本人は、この一枚の畳の広さを基本に、室内空間を作ってきた。四畳は、4人の大人が生活するのに、最低限必要な広さである。ちょっと手を伸ばせば物がとれるし、お互いがぬくもりを感じる広さなのだ。ただし、四畳ではゆとりがなく、お互いギスギスしてしまうので、こたつ分の半畳を加えることによって、お互いの「間」とった。この四畳半が、日本人にとって落ちつく広さなのだ。長い間、このような生活をしてきたところに、日本人の空間感覚がある。

一方、欧米人の空間の広さは、Foot の複数形であるフィート(Feet)で測られる。フィートは人間の歩幅をもとにした単位である。フィート法による家屋は、立って生活する空間である。立って生活するには、それなりの広さが必要となる。このような家屋で育ってきた欧米人の生活空間は、日本人より広いことが容易に想像つく。

加えて、ヨーロッパ大陸は陸続きであり、常に他民族が侵入してくる危険があった。何度も繰り返すが、その歴史は、侵略したりされたりの繰り返しであった。他民族に対する警戒心(身の安全に対するとらえ方)は、日本人が持っている感覚とかなり違う。

《エレベーターの中で》

アメリカでよく経験することだが、エレベーターに乗り合わせたアメリカ人同士が、お互い見ず知らずの間柄でも、"Good

morning!" とか「ハイ!」と言葉を交わしている。多民族が集まったアメリカ人の生活の知恵といえる。

単一民族で形成されてきた日本では、他人に対する警戒心はうすい。征服された経験がないため警戒することに慣れていない。同じ日本人同士ということで、「私はあなたの敵ではない」ことを表現する必要などなかった。

ヨーロッパやアメリカでは、状況が日本とは違う。人種の違う人たちが大勢いる。人種が違えば価値観も違う。多様な価値観の人種が集まっている国では、お互いに敵でないことを、いつも表現していなくてはならない。知らぬ同士でも挨拶の言葉を交わす。言葉だけではなく動作でも表す。エレベーターの中で目が合うとほほえんだりする。日本の社会では、エレベーターの中で目があっても、見知らぬ人には無表情である。

これは習慣であり、マナーに近いものとなっている。日本人が海外に出るときは、自分たちの生活習慣をそのまま持ち込まないほうがよい。いつもニコシしている必要はないが、相手がニコシしたら「ほほえみ返し」ができるようになるとよい。

一方、ヨーロッパ人は、アメリカ人ほど愛想よくしているのを見かけない。どちらかという时无表情である。異民族に対して、この人は敵かもしれない、と無意識のうちに緊張しているのかもしれない。

《ドアがバツン》

日本でも、欧米式に押したり引いたりして開けるドアが多い。ところが、日本では、開いたドアを後の人のために、しばらく手で押さえることをしない。手を放してしまうので、次の人は閉まりかけたそのドアをふたたび開けて出入りすることになる。押して開けるドアの時、へたすると、前の人解き放ったドアが、自分のところめがけて勢いよく向かってくることもある。

欧米では、後ろに人がいるときは、開けたドアをしばらく手で押さえ、そのまま次の人に渡すのが習慣(マナー)になっている。次の人は、前の人に「サンキュー」と言いながら、ドアを引き継ぐように開けたまま押さえる。次の人は、その次の人のためにドアを開けたままで押さえている。人の流れが続いている限り、この動作が繰り返される。

ロンドン基地 CA も、街でパートやレストランに入るときは、同

じようにしている。かならず次に入ってくる人がいないかをふり返って確認している。後ろに人がいれば開けたドアをそのまま押さえているし、いなければドアを放す。

ところが、自分たちの習慣が日本でも行われていると思い、そのつもりでいると、前的人是はさっさと行ってしまい、ドアが勢いよく閉まりかけてくる。「オット!」と言いながら、ドアがぶつかって来そうになるので押し止める。ある CA は、閉まりかけるドアで思いっきり高い鼻を打ってしまった。

元来、日本の家屋は、玄関にしてもふすまにしても、戸を横にスライドさせて開閉する方式になっている。ドアというより「戸」という感覚である。ドアは押し開けるものであり、横に開けるのを英語では、あえて「スライディング・ドア」と呼ぶくらいだ。日本の家屋の影響もあり、日本では「スライディング・ドア」もかなりあり、それを自動ドア化している建物も多い。欧米型のドアを設置しているのは、洋風住宅やビルディングなどで見かける。反対に、欧米ではスライディング・ドアをほとんど見かけない。見かけるのは押し開け式のドアか、ホテルなどにある回転式ドア(Revolving Door) である。日本では、洋式ドアは取り入れたが、その背景にあるドア文化までは取り入れきていない。また、日本人のせっかちな性格も、次に続く人のことまで考える余裕はないのかもしれない。

《定時運行》

日本の印象は、と聞かれて、彼女たちは、「日本では列車の運行時間が正確である」

と答える。イギリスでは、日本に比べ列車が遅れることが多いらしい。特に、中長距離列車がよく遅れるらしい。

授業の合間に、ロンドン基地 CA たちは、東京郊外の鎌倉や日光や箱根に足をのばしていた。東京駅から横須賀線に乗ったり、新宿まで出て小田急ロマンスカーで湯本まで行き、そこから箱根登山鉄道に乗換えたり、浅草から東武ロマンスカー(スパーシア)に乗ったりした。外国で、1人で鉄道を利用できるようになったら旅行者として一人前であると、前にも書いた。外国人旅行者にとって電車に乗るのは、停まる駅のことや時刻のことが不安である。日本の郊外型電車は、外国人の利用頻度も多くないためか、電車の行き先表示が、英語で書かれていることは少ない。英語で書かれていても、電車の行き先と自分の行き先が違うことの方が多い。この

電車は、自分が目指している駅に停まるのだろうかと不安になる。

ロンドン基地 CA たちも、ちょっとした旅行で電車に乗る時は、時刻表をたよりにせざるを得ない。そして、降りる駅は、何番目の駅かをも調べておく。日本では、電車が正確に出発するので、大いに助かるそうだ。

《カラオケ》

パリ滞在中に TV を見ていたら、フランス語で「カラオケ」と言っていたのを耳にした。東南アジアの国々では、繁華街のいたる所にカラオケの看板がでている。最初の頃は、日本人駐在員が利用していたが、最近では、その国の人々もカラオケがすっかり気に入っているようすだ。その国で流行っている曲を用意しているカラオケ店が増えている。

翌年、5 期を担当したとき、「カラオケに行ってみよう」というので、何人かのロンドン基地 CA を、寮近くのカラオケスナックに連れて行った。日本のスナックは、イギリスではパブにあたる。パブというと、少し背の高いバーカウンターで飲物を注文し、受け取って自分たちのテーブルで飲む。カウンターで立ったまま飲んでいる人も多い。日本のスナックは、カウンターは低く、中にあるのはバーテンダーではなくママさんが多い。お客には、飲物だけではなく、手料理も提供し、ときに、おふくろや女房の代わりをつとめてくれる。それを売り物にしているところが多い。

マイケル、アンマリー、ポーラ、マリーと5人でスナックに入った。カウンターに座ると、外国人の客を迎えるのが初めてなのか、「あらどうしよう!」という顔をしている。

「実は、日本に来たばかりなのだが、カラオケに興味があるというので連れきた。よろしく」

と云うと、

「外国人もカラオケに興味があるの?」

と、うれしそうに歌詞カードを持ってきてくれた。

最近のカラオケでは、ヒットチャートに入るような、外国の最新曲も用意しており、英語でも歌えるようになってきているところが多い。当時、街中のスナックでは、若い外国人向けの曲など用意していない。1960年代に流行したビートルズやプレスリーの曲くらいだった。それでも、居合わせた客たちがカラオケで歌っているのを見て、自分たちも歌ってみようという。ビートルズナンバーは、いまではスタンダード曲になっている。イギリス人

なら誰でも知っているようだ。筆者も若いころよく歌った。マイケルが「イェスタデイ」にするという。ママさんが準備をしてくれる。なつかしい曲が流れてくる。

“Yesterday, all my troubles seemed so far away.

Now it looks as though they're here to stay. Oh, I believe in yesterday.”

ところが、カラオケも慣れが必要なのだ。音をとるのがむずかしい。キーが日本人用になっているらしい。マイケルのキーとカラオケのキーが合わないらしく、なかなか音が取れない。聞いていて何か変なのだ。もう一度、やってみたがやはりダメ。そこに居合わせたビートルズ育ちらしい客が、一緒に歌ってくれるという。出だしを彼にリードしてもらったところ、今度はうまく歌うことができた。

宴会文化の日本で育ったカラオケは、カラオケの騒音を気にするよりも、思いっきり歌うことによって、ストレス解消ができるため、人々に受け入れられている。騒音をあまり気にしない東南アジアの国々でも受け入れられている。

イギリスのパブやバーで飲むことがあるが、どこもワイワイガヤガヤと騒々しいということはない。みな静かに飲んでいる。あちこちのテーブルで話しをしているのだが、静かなのだ。ロンドン滞在中、邦人 CA たちと飲みについて、つい大きな笑い声をあげてしまう。すると、たいていジロツと冷たい眼差しを向けられる。

このような社会でカラオケ文化が育つか、楽しみにしている。ヨーロッパ人の、静粛さを好む部分とストレスと発散したい部分の綱引きがしばらく続きそうだ。一つ言えることがある。その後、1000人近くのロンドン基地 CA が誕生しているが、カラオケをうまく歌える人が増えているのは確かだ。

《香典袋》

機内の仕事だけでなく、外国人 CA たちに、もっと日本の日常生活を知ってもらおうと、訓練部長の発案で、「ホームビジット(Home Visit 家庭訪問)」をすることになった。週末に、訓練部の教官や課長の家に招いて、それぞれの町の様子を案内したり、日本の家庭料理をご馳走したりした。発案者の部長も、先頭に立って、何人もの訓練生を招待していた。

月曜日の朝、教官室にいと、週末にホームビジットをしてき

た訓練生がやってきた。先週、自分たちを招待してくれた教官に、これを渡して欲しいと香典袋を差し出したのだった。香典袋を出されたので、不審に思い尋ねてみると、袋の中には、ホームビジットの礼状が入っていると言う。

「きみたち、これをどこで買ってきたんだい」

「会社の生協の売店で見つけました。赤い色のものと黒い色のものがあつたのですが、黒い方が、品がよかつたので、お礼状を入れるには黒い方がよいと思って買ってきました」

「これはね、香典袋といってね、葬式に参列するときに、中にお金を入れて差し出すものなんだよ。赤い方は、結婚式などの時に使うもので、やはり中にお金を入れるのだ。赤はお祝い用、黒は弔意用なのだ」

それを聞いた彼女たちは、売店にすつ飛んで行ったのだ。

— 続く —